

取りつかれた末、田道間守を常世に遣つて不老不死の仙薬や果実を持ち帰るように命じた」  
こう考えることで、饒速日がその名に天照国照と冠されることや、仙化した帝と呼ばれること、  
さらに彼の墓が宝来山（蓬萊山）古墳と呼ばれることが、すんなりと納得できるはずだ。

### ● 皇祖皇宗に奉る郊祭

月日が流れて、ヒミコの墓（箸墓古墳）がバチ形の前方後円墳に様変わりすると、神武はそこに祭場を設けて、厳かな儀式に臨んだ。まず女王トヨの亡き骸をホケノ山古墳から掘り出して方墳のバチ形部に再葬した後、二重口縁壺や花なども供えながら女王トヨの冥福を祈った。

三〇四年の春二月二十三日（桃の咲く頃）、上之宮（笠縫邑）南方の鳥見山山中に皇天二神（日神と高皇産霊）の御陵が完成すると、神武はその円墳・方墳上に靈時まつりのにわ（天地五帝の神霊を祭る靈廟）を造営して、高皇産霊に代わって郊祭に臨んだ。すなわち、箸墓円墳に眠るヒミコ御霊を日神御魂に蘇らせた上で靈時に移し祭るとともに、纏向石塚古墳に眠る天照大神御霊を高皇産霊御魂として招来し、共に天（日天神）に配したのだ。

その間、猿女君らが神楽を舞う中で、天富が祝詞を長々と奏上していた。ついで、神武は神璽の鏡剣を捧げ持つて皇天二神の再来を願いつつ、お礼の言葉と決意を申し述べた。

「我が皇祖みおやの御魂は、日の光となって天より降り賜い、私の身を金色の光で照らして加護して下さった。今、数々の敵を平定して、天下も平穩に治まっております。そこで天に配してお郊祭まつし、その教えるところに永久に従いたいと誓った次第です」

「神武紀」、わたま「我が皇祖の靈、天より降りみて、わが身を光し助けたまえり。今、諸もろもろの虜あたとど

すでに平けて海内事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝（皇天にしたがうこと）を申べたまうべし、

「靈時を鳥見山の中に立てて、皇祖天神を祭りたまう」

『古語拾遺』（忌部氏家記）、「靈時を鳥見山の中に立つ。天富命、幣を陳ねて祝詞して皇天を祀り、群望を遍祓りて、・・」、

「聖皇（天皇）の登極（天つ日継ぎしろしめ）して、終を父祖に受けたまい、上帝（五帝）を類り、六宗を祀り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、天照大神（日神と高皇産靈）

はこれ祖これ宗、尊きことならび無し」

☆磐余地方から香久山北部にかけての地は、古来、磐余邑と呼ばれた。『日本書紀』や地元の話によると、この辺りに磐余彦軍が駐留して、その地名もこれに由来する」としている。

「神武紀」、「磯城の八十タケル・・、遂に皇師の為に滅さる。名けて磐余邑と曰う」

☆鳥見山は、桜井市外山にある標高二四五メートルの山だ。

☆神功も、この磐余地方に稚桜宮を置いた。

つまり、神武は高皇産靈が封禪を成したとしても道理に適うと見て、彼に代わって柴を勢いよく燃やす中で封禪さながらに郊祭し、その高煙が天に通じたところでお札の言葉を申し述べるとともに、皇天二神を天に配して皇祖皇宗に奉ったのだ。加えて、天照大御神之御魂（真経津鏡）および草薙剣を二神の天璽と定め直したことや、若かりし頃の豊受皇太神（御饌津神）を農耕神

に列して、秋になると新穀を捧げることもお知らせした。

この儀式の抛りどころは五帝期の封禪や、成王を補佐した周公が后稷（周祖棄）を南郊に祀つて天（農耕の天神）に配し、秋に新穀を奉った周礼、また文王を明堂に祀つて皇祖に配した周礼、さらに光武帝が漢朝を再興した際の封禪や郊祭にあったことは明白だ。

★封禪とは、五帝最初の黄帝が泰山の頂で円壇を築いて天を祀り（封祭）、ついで山麓の梁父山で地を方形に均して地の神を祀る儀式（禪祭）を言った。かくして、黄帝は天帝や仙人たちと親しく交わり、人でありながら不死身に成り得たという。即ち、現人神となったのだ。

次に、堯から跡を託された舜が封禪を試みた。彼は天体の動きを見て天意に適うと知るや、上帝に対して類の祭を行い、六宗に禋りくそうの祭をし、山川に望ぼうの祭をして、群神もあまねく祀った後に諸侯の玉器を収めて吉日を選び、並み居る臣下たちの前でこれを分け与えた。

★周公は幼い成王を助けて政に就くと、后稷を南郊に祀つて天に配し、文王を明堂に祀つて上帝に配した。それ以前に、火徳をそなえた文王は赤い鳥が現れるという瑞祥によって、封禪の天命を受けたが泰山での封祭を行わず、武王も殷を破った二年後の天下が未だ安定しない時期に逝つてしまった。これからすると、続く成王が封禪を成したとしても、道理に適うとされた。そのこともあつてか、古来、周では冬至の日に南郊して天を祀るとともに、日が長くなることを祝った。また夏至の日に北郊して地の神を祀った。

★『後漢書』『光武帝紀』、「(二五年) 六月末、皇帝の位に即く。燔燎はんりようして天に告げ（柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告し）、六宗に禋えんし、群神に望ぼうす。・・ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し。・」

（五六年二月）光武帝は魯国から泰山に向けて巡幸した。遠くから泰山を望む地で柴を焚きな

がら望祭した後、泰山の頂と麓の梁父山で封禪を成し遂げた。

建武中元二（五七）年春正月に初めて北郊を立て、后土（地の神）を祀った。その直後、倭奴国王の遣いが海を渡ってはるばる朝貢してきた。

★『魏志』『明帝紀』、「（二三七年十月）魏の明帝は洛陽の南に円丘を築き、ついで十二月冬至の日に初めて郊祭を行った。翌年正月早々、彼は司馬宣王に兵四万を授けてを公孫淵討伐を下命した。翌年十二月、女王ヒミコの使節が明帝に見えた。

★泰始二年（二六六年）の冬十月、仙人のいで立ちをした女王トヨの遣いが晋の都に参つて貢物を献上した。すると、武王は翌月冬至の日にあたふたと郊祭して天地を祀り終えてから、仙人に見えたのだった。

『晋書』『武帝紀』、「泰始二年十一月、倭人來りて方物を献ず。南と北に円丘・方丘を併せ、二至の祀郊に合す」

この鳥見山から北へのびる尾根上には、四世紀初めに造られた日向型の柄鏡形前方後円墳が鎮座する。桜井茶臼山古墳と呼ばれるそれには、樹齡千年以上の巨木からなる木棺が安置されていて、その内外に二十六面の三角縁神獸鏡をはじめ、内行花文鏡・方格規矩鏡・画文帯神獸鏡・獸帯鏡など八〇面以上の銅鏡、それに三種神器である曲玉・鉄劍、さらに王権を示す碧玉製の玉杖・玉葉が副えられていた。

その円墳上に土を盛った方形壇があつて、その周りを底のない祭祀用壺が取り巻く。この古墳は帝王級副葬品が豊富にあるにもかかわらず、被葬者の名も伝わらない。

#### 【桜井茶臼山古墳】省略

その後の神武は、程なく崩御したのか、隠遁したのか、消息は不詳だ。

磐余地方にある巨大なメスリ山古墳（桜井市、四世紀の初め？）も、阿部丘陵上に造られた謎多

き柄鏡形の前方後円墳だ。後円部にある長さ八呎の主室は盗掘されていたが、それでも三角縁神獸鏡片・内行花文鏡片、各種石製品・玉類などが出た。盗掘を逃れた東の副室からは、儀礼用らしき鉄製の弓・矢五本、鉄鏃二一二、鉄製のヤリガンナ、斧、手鎌、ノミ、刀子、ノコギリ、銅鏃二三六が出土し、さらに玉杖四本分に相当する石製品など帝王級副葬品が多数見つかった。類似の玉杖は桜井茶臼山古墳からも出ている。

この円墳上にも方形壇があつて、最長二・四呎もの円筒形埴輪が壇の周辺を二重に取り巻く。にもかかわらず、被葬者の名は伝わっていない。

『古事記』には、「磐余彦天皇）御陵は、畝傍山の北、白檮の尾の上にあり」とあるが果たしてそうだろうか。磐余地方の山の稜線に、四世紀初めに造られた日向式の柄鏡形前方後円墳が『日本書紀』の記述に沿った形で二陵も築かれたことは、以下の遺勅や言葉と無関係ではあるまい。

★魏武王（曹操）の布令、「古は、必ず地味で瘦せた土地で行われた。戦国期の魏の臣下が西の高原上に寿陵（生前に造る墓）を造った際も、高地を利用して土を盛らず、木も植えなかつた」

★魏文王（曹丕）の定めた寿陵制度、「その昔、堯は穀林に埋葬され、その陵には穀林と同じ木が植えられた。そのことで、陵と山林の識別が難しくなり盗掘を免れた。土盛りや植樹する墓は古の精神にはずれており、採用するところではない。寿陵は山形を利用するに止め、土盛り・植樹をしてはならぬ。陵上の祭殿、陵を守る村落、陵への参道も設けるでない。葬送は上古の建前に則り、金銀銅鉄で造った葬送品を使わずに土器だけで済ませ・・・」

漢文帝陵が暴かれなかつたのは、そこに盗賊の欲しがらる宝物がないからであり、光武帝陵が盗掘されたのは、一見して墓と分かる土盛り・植樹が施されていたからだ。親の威信にこだわらばかりで遺勅を守らない明帝が、親に被害を与えた。陵を築く上での大事は、万世にわたつて靈魂が危険に曝されぬようにと気配りすることだ」